

トウンリリミス寓話
「魔女と王さま」
(後編1)



2022/12/16



エリー



目次

本文	1
----------	---

本文

01 歌うニニー

ひゅーう、スパン。

うっ。

上半身裸で四つん這いで丸太に縛られたウツギ13歳(男)がムチ打たれている。

背中には無数の傷跡があり、血がにじんでいる。

そばに立つニニー13歳(女)が、マグノリアの祈りの歌を歌っている。

ニニーの隣でイイギリ13歳(男)が、祈っている。

3人がなぜこうなったのか？

始まりはニニーが6歳のころまでさかのぼる。

02 運命

ニニーの母ピメレアは、兄のゲウムを自宅で必死にもてなしていた。

6歳になるニニーにゲウムを会わせたくないのだ。

魔法使いであるゲウムは、ニニーに魔法の才能があるなら、養女にもらい弟子にした
いのだ。

ニニーの祖父マグノリアは初代魔法使いと呼ばれるグリーン教を改革した偉大な人
物だ。

聖地サンサリーンで歌い続け、神の声を聞いたのだ。

神への返事として祭典の歌を歌ったのは、祖母のヤーコンだ。

グリーン教が信じられているトゥンリリミスでは、グリーンさまという宇宙生命
体の体内で生きていと信じられている。

過去には偉大な神と信じられていたグリーンさまは、実は無力な存在。

マグノリアが真実を暴露した。

人次第と知った人々は2つに分かれた。

「自分がやる」と行動を起こしたものと、偉大な神の幻想を捨てず祈り続けたものだ。

真実を知っていた魔法と魔法使いは、自分たちの時代が来たことを悟り、指導的な立
場に就いた。

魔女の条件は、ほうきで空を飛ぶこと。交通手段が馬しかない時代に、空を飛ぶことは有利だからだ。

エルメラダ王国では、持つて能力でなれるものが決まってしまう。

王族以外でもっとも優先順位が高いのは魔女と魔法使いだ。

もし、ニニーが空を飛べたら城に連れていかれてしまう。だから試すことを拒み続けていた。

なぜならニニーは祖母ヤーコンや母ピメレア同様に歌の才能があったからだ。

しかし歌手の優先順位は一番低く、目が見えないなどの障害がないとなれない。

ヤーコンとピメレアは視界の狭い種類の盲人だ。

ニニーの父ドドナユラは、読み書きができない。

ではニニーは？

視界はよいようだ。

言葉を話すのは早かった。

読み書きは教えられないので教えてない。

マグノリアの血を引くニニーに魔女の才能があってもおかしくない。

だが、ピメレアはニニーが遠くに行ってしまうのが嫌だった。

大人たちの思惑を知らないニニーは、みんなをびっくりさせようとする。

こっそりゲウムのほうきに乗り、はじめてにもかかわらず天高く飛べた。

そしてピメレアとゲウムがいる居間の窓から飛び込み、椅子や机をなぎ倒し、華麗に着地した。

ピメレアは膝から崩れ落ちた。

ゲウムはニニーの天才的な才能を確信した。

自分の運命を知らないニニーはにこにこ笑ってる。

03 別れ

ニニーは7歳でゲウムの養女になった。

すぐに家に帰れると思っていたニニーは、割りとおっさり家を出た。

「またねえ～」とニコニコついていくニニーを見て、ピメレアは悲しみをこらえて手を振り返した。

ほうきに乘れるニニーは、月に一度は帰ってくる。お菓子をいっぱい用意して待ってあげよう。

サンサリーンの名産の甘い焼きがしがニニーの好物だった。

まだできることがある。それだけがピメレアの心の支えだった。

04 新しい家

ゲウムには、エンジュという同い年の男の子がいた。
気が強くて、思い立ったらすぐに行動するニニー。
おだやかで、慎重なエンジュ。
二人は対照的だった。
魔女修行の最初の課題の蒸留水作りも、ニニーは教えなくても考えてできた。
不純物の少ないわき水を汲み、炭でろ過して、鍋にボールを浮かべ、ふたを冷やして、水滴を集めた。
字はまだ読めなかったが、挿し絵と道具を見て想像したのだ。
エンジュもニニーを見てできた。
あまった時間をニニーは歌の練習に使った。
ニニーはまだ、魔法の才能があると歌手になれないことを知らない。
母ピメレアから祖父マグノリアと祖母ヤーコンの話を聞いていたニニーは、自分もグリーンさまに歌で話しかけて返事をしてもらいたいと思っていた。
本当にグリーンさまが存在するのか知りたかったのだ。

05 部下

7歳から12歳の間、ハーブの利用方法などの知識を得たニニーとエンジュは、13歳でそれぞれ2人の部下を持った。
説明されなくてもできたニニーは、部下に説明しなかった。
13歳のイイギリは、期待に応えようと本を読み、独学で蒸留水作りを学ぼうと努力した。
同じく13歳のウツギは、ニニーが何も言わないのをいいことに、大好きな筋トレに励んだ。
部下に仕事を割り振らず、自分一人で完璧に素早くこなして、グリーンさまに呼び掛ける歌を歌い続けた。

06 試験

半年が過ぎた。
エンジュは部下のキリとクコに学んだことを教えてできるようにしていた。
だから一人では作れない大量の蒸留水を用意するように言われても難なくこなせた。
何も教えてこなかったニニーは、1週間徹夜で作り続けて課題をこなした。
ニニーの蒸留水は完璧だった。

しかし試験に落ちた。
エンジュだけが合格した。
1ヶ月後の再試験を言い渡されたニニーは、ゲウムに食って掛かる。
「わたしの蒸留水は完璧だったのになぜ？」
「持続性がないからだ」
部下に仕事を振らないといけないと知ったニニーだが、やる気がないものに教えるつもりはなかった。
部屋に戻るとイイギリとウツギが訪ねてきた。
不合格の理由に気づいてたイイギリがニニーに言った。
「もっと僕らに頼ってよ！」
「でもできないんでしょ？」
バカにしたように切り捨てるニニーに、瓶に入った蒸留水を渡すイイギリ。
「ニニーはどうまかないけどできるよ」
中身を確認したニニーがつぶやく。
「合格」
ニニーとイイギリがウツギを振り返る。
「俺は何も言われてないし知らねえ」
ウツギに背を向け、ニニーがイイギリだけに言う。
「水はどこで汲んだの？」
二人で仲良く話す。
「お願いされたらやってやってもいいぜ」
セリフを残してウツギが部屋に戻る。

07 怒るウツギ

ウツギは、ニニーがお願いしにくるのを待っていた。
(まさか無視し続けないよな?)
しかし3日経ってもニニーは探しにこなかった。
逆上したウツギは、ゲウムに訴える。
「ニニーとイイギリが俺を無視した。辞めてやる！」
ゲウムは淡々と答えた。
「ウツギの解任はニニーの権限だ。辞めたいならニニーに言いなさい」
自分から会いに行くのは癪だが、仕方がない。
ニニーとイイギリは予想通り実験室にいた。
「俺は辞める」
背を向けたままニニーが答えた。
「分かったわ」
カチンと来たウツギはニニーの肩をつかみ、自分の方を向けさせた。

「確かに俺は何にもしなかった。だがニニーが教えなかったからじゃないか。俺はお前が許せない。謝れ！」

ウツギの手を振り払いニニーが答えた。

「わたしはわたしがやりたいようにやった。ウツギもウツギがしたいようにした。やりたいことをやらせるのがわたしの方針。だから謝らない」

睨み合うニニーとウツギの間にイイギリが入る。

「ニニーは強くて優秀だから自力でできるけど、弱くて不出来な人は聞きやすい環境を整えないと分からないもんだよ」

ウツギがイイギリを殴った。

「俺が弱くて間抜けだっていったのか！」

2発目を打ち込もうとする腕をつかむニニーが、振り払われて本棚に吹き飛ぶ。

厚い本が落ちてニニーの頭を直撃する。血を流し、意識を失ってしまう。

08 罰

保健室で目覚めたニニーの耳に喧騒が聞こえる。

外に出るとウツギがムチ打たれている。

近くの人に聞くニニー。

「どうなってるの？」

面白そうに答えるおじさん。

「あの男の子は上司に怪我をさせた罪でムチ打ち 100 の刑を受けてるのさ。まだ 10 であんなにぼろぼろで持つのかね」

人をかき分け、ニニーがウツギに駆け寄る。

ゲウムを見つけると叫んだ。

「やめさせて！」

断固としてゲウムが首を横に振る。

「罪は罪。部下として引き続き城に置くらさちんと 100 打たせなさい」

ウツギの右手をニニーが握る。

「自分のことだけ考えて、部下に教えなかったわたしが間違ってた。ごめんなさい。わたしのために 100 回叩かれて。今度はちゃんとおしえるから！」

イイギリが左手を握る。

「教えることはなかなかできなかった僕の方がうまいと思うよ」

うなずいて見せるイイギリ。

「二人とも離せ！」

ウツギの強いことばに、顔を見合わせ離れるニニーとイイギリ。

「俺は俺の罪を償う。100 打ってくれ！」

自分の腕を噛んで、悲鳴をあげないようにウツギが我慢する。

ピシッという音の度に、ビクッとするニニー。

自分の悪かった態度が走馬灯のように頭に駆け巡って、自分が叩かれるよりずっと辛い。

こんな時に原因となった歌を歌ってよいのか分からなかった。

でも衝動的に、マグノリアがグリーンさまに呼び掛けた祈りの歌が口から出てきた。

初めはつぶやくように小さな声で、だんだん全身で祈るように身体中を響かせて歌い続けた。

そして 100 の声と共に、人々は神の旋律が流れるのを聞いた。

ゲウムがニニーの肩に手を置いた。

「それでもお前は魔女なのだ。歌手にはなれない」

グリーンさまが懺悔の祈りを聞き届けて声をかけてくださったのだ。

もう歌手への未練はない。

魔女として生きよう。

ニニーは運命を受け入れた。

トゥンリリス寓話「魔女と王さま」(後編1)

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
